

令和 7 年度ユースチャレンジ！コラボプロジェクト
採択事業検討会（1 日目）議事要旨

- 日 時：令和 7 年 5 月 19 日 17:00～20:00
- 場 所：仙台市市民活動サポートセンター 6 階 セミナーホール
- 出席者：柴田由紀委員長、大井菜摘委員、太田貴委員、齊藤祐輔委員、眞野美加委員
※過半数の出席により委員会成立
- 事務局：市民協働推進課長、連携推進係長、他担当職員

■次第

- 1 開会
- 2 挨拶
- 3 委員紹介
- 4 議事
 - （1）検討会の運営について
 - （2）プレゼンテーション・審査
- 5 閉会

■会議内容

1 開会

2 挨拶〔柴田委員長〕

(省略)

3 委員紹介〔事務局（連携推進係長）〕

(省略)

4 議事

(1) 検討会の運営について

〔事務局（連携推進係長）〕

- ・資料1に基づき説明

〔柴田委員長〕

- ・議事録署名人については、出席者の中から五十音順で指名したい。

今回は大井委員にお願いしたい。

(大井委員 了承)

(2) プレゼンテーション・審査

- ・事業プレゼンテーション

(省略)

- ・質疑応答

次ページのとおりに

事業 1

事業名：《自由提案型》子どもの力で地域を盛り上げよう！～生活力向上体験＋生きた語学の学び～

団体名： 仙台りぼんむすびクラブ

柴田委員長：

生活力と英語、この 2 つの要素を組み合わせた活動であると理解している。

12 回開催とのことであるが、毎回異なる場所で開催するのか、それとも特定の地域で開催するのか伺いたい。

団体：

市内各地の市民センターにて実施する予定である。なるべく幅広い地域からの参加を促すため、さまざまな地域での開催を計画している。

柴田委員長：

地域とのつながりや、参加者同士のきずなを深めることが目的の一つとのことであるが、様々な地域で開催する場合、1 回限りの参加となることが考えられるが、つながりを築くことができるのか。

団体：

深いつながりというよりも、「こういう人たちがいるのだ」と知ってもらうきっかけになると考えている。市街地と郊外における生活の違いを知ることも含めて、気づきや再会の喜びを感じられる場としたいと考えている。

太田委員：

講師謝金が計上されているが、具体的にどのような方々が講師を務める予定か。

団体：

国際交流イベントにおいては外国人講師を、裁縫や工作についてはその分野に精通した方を招く予定である。一方的な講義形式ではなく、共に作業をしながら自然な会話や学びを重視したいと考えている。

太田委員：

予算案を見ると、「工作イベント 4 回」「国際交流イベント 4 回」「裁縫教室 4 回」で計 12 回の実施となっている。食育イベントはどこに含まれているのか。

団体：

食育イベントは国際交流イベントに含まれている。例えば、外国のお菓子を食べたりティーパーティーを開催したり食文化に触れる活動などを想定している。

齊藤委員：

過去の活動において、目的の達成を実感した事例があれば教えていただきたい。

団体：

母体の団体においては、長年にわたり親子料理教室などの食育活動を実施してきた。最近では、英語を使った和菓子作り教室を開催した。関心を持った参加者のこどもが自宅でも再現したという声が寄せられている。

齊藤委員：

イベントの参加予定者数および運営体制についても追加で説明をお願いしたい。

団体：

イベント参加者は、1回の活動につき6～8組の親子を想定している。

運営スタッフについては、ボランティアを含め、会場の規模や内容に応じて1組の親子に1人はボランティアが付くようにするなど適切に配置する予定である。また、教育分野を志す大学生や、英語に関心のある人にも呼びかけを行っている。

大井委員：

予算の中で講師料としての謝礼が多く計上されているが、ゆくゆくは謝礼を支払わず自分たちが講師となって自走していけるようなプログラムにする予定はあるか。

団体：

私自身がそうだったように、ボランティアとして関わってくれている方に将来は運営を手伝ってもらうことを想定している。イベントの中でボランティアの育成をしつつ、講師の方をお招きしなくても活動できるような仕組みを作っていく予定。

眞野委員：

メンバー8名は専任なのか。12回という回数は実現可能な回数なのか。

団体：

専任ではなく兼任。回数については理想の回数である。

眞野委員：

申請書に記載された他団体との連携について、詳細を伺いたい。

団体：

子育て支援団体や食育活動団体など3団体と協力する予定である。相互に連携を図っていきたいと考えている。

眞野委員：

地域福祉への波及効果として、どのような点に期待しているのか。

団体：

共働き世帯や孤立しがちな家庭にとって、こうした交流の場は貴重な居場所となり得る。地域に「また会える人」ができることが、地域福祉の向上につながっていると考えている。

事業2

事業名：「自由提案型」 仙台美化鉄プロジェクト

団体名： 竹親連合会

大井委員：

普段の活動における平均の参加人数、参加者の属性を教えてください。

団体：

普段はメンバーのみで活動している。人数は1～3人程度であることが多い。

大井委員：

参加者の集客については、どのように行う予定であるか。

団体：

主に SNS (X、Instagram 等) やごみ拾い促進プラットフォーム、ごみ拾い活動がまとまったサイトを活用する。また、仙台市の広報媒体を活用することも検討している。

柴田委員長：

過去にごみ分析のような取り組みを行った実績はあるか。

団体：

昨年度、信託基金を活用した事業において、七北田川沿いでのごみ拾いと分析を行った。七北田川沿いではバーベキューごみが多く、国分町ではビン・カン・ペットボトルが多いなど、地域ごとの特徴もある。ごみの種類に応じてごみ箱を設置することで、ポイ捨てごみは減らせると考える。

柴田委員長：

ごみを拾うことよりも捨てさせないことが重要であると考えます。

太田委員：

活動回数が29駅分とのことで、相当な回数になるが、これは同日に複数駅を実施するのではなく、1駅ずつ別日に行う想定であるか。

団体：

原則として1駅ごとに1日、別日に開催する形で想定している。ただし、近接する駅であれば、午前・午後に分けて同日に2駅開催することも検討している。

太田委員：

1回あたりの想定参加人数はどの程度であるか。

団体：

駅によって規模感は異なるが、基本的には 10～20 人程度を想定している。大きな駅であっても 20 人を上限としている。あまりに人数が多いと運営に支障が出るためである。今後、毎年実施していくうえで参加人数は増やせたらと思う。

眞野委員：

そもそごみ拾いを始めたきっかけは何であるか。

団体：

小学生低学年時の授業がきっかけである。ごみが増えていて環境が悪化していることを知り、高校入学前の春休みから本格的な活動を始めた。

眞野委員：

活動の中で得られた知見等を、今後町内会などの出前講座で啓発活動として発信する予定はあるか。

団体：

過去に小学校で出前講座をしたことは何度かある。機会があれば町内会での出前講座にも挑戦したい。

齊藤委員：

ごみがなくなるというメリットのほか、やってみて良かったと感じることはあるか。

団体：

達成感を感じられることである。単純にごみ拾いが楽しいとも感じている。

齊藤委員：

そうした達成感や活動の魅力・面白さを、SNS などであまりうまく発信することができれば、参加者の増加にもつながるのではないかな。

団体：

ご指摘のとおりである。ごみ拾いをすることでまちを知るきっかけにもなり、「自分の知らない地域に行く楽しさ」も合わせて伝えていきたいと考えている。

事業3

事業名：《テーマ設定型》 てらいく大運動会 ～みんなでつな GO！健康バトン～

団体名： てらいく

柴田委員長：

普段の活動どれくらいの人数が参加しているのか。また、今回の運動会における想定参加人数と、そのための広報方法について教えてほしい。

団体：

普段の活動では、一度に20～30名程度のこどもたちが参加している。今回は3拠点それぞれで開催を予定しており、各回40～50名程度のこどもの参加を見込んでいる。

広報については、チラシの配布およびSNSの活用を行う。特に児童館と地域コミュニティとの連携を活かし、周知および参加促進を図っていく予定である。

柴田委員長：

児童館主催の活動と、今回のような独自イベントを開催する場合の違いや、学生主体で行うことのメリットについて教えてほしい。

団体：

児童館主催の場合、対象者は地域のこどもに限られるが、今回のイベントでは仙台市全域のこどもを対象にする。

そこがメリットであると考えている。

大井委員：

「健康になれる仕組みづくり」というテーマに応募してもらったが、運動会の中で健康になるための工夫を考えている点はあるか。

団体：

運動をして体を動かしながら知識を得ることで、知識がより定着すると思う。

大井委員：

運動会の中で行う「健康知識を取り入れた競技」について、具体的にはどのような内容を想定しているのか。

団体：

例えば「野菜争奪戦」を考えている。野菜の栄養や特徴をヒントに野菜を争奪し、遊びを通じて自然に健康知識が身につくよう工夫する予定である。そのほか、クイズ形式のゲームなども検討している。

齊藤委員：

参加している大学生にとっての良かった点や変化はあるか。

団体：活動の中で子どもたちとの交流の場を持つことができ嬉しかった。また、年齢という壁を越えて話す良い機会になっていると感じる。

齊藤委員：

活動を続ける上での最大の課題は何であるか。

団体：

「最初の一步を踏み出すハードル」が最大の課題であると感じている。現在約 80 名のメンバーが在籍しているが、加入してから実際に活動へ参加するには勇気が必要なようであり、特に 1 人で入った学生はなかなか参加しないケースも見受けられる。

眞野委員：

中学生にボランティアとして参加してもらおうとのことだが、当日の運営の手伝いのみか、それともイベント企画にも関わるのか。

団体：

当日の運営の手伝いとして考えている。

事業4

事業名：《自由提案型》親子のハローフロスプロジェクト

団体名：東北大学歯学部 歯科医療研究会

柴田委員長：

幼稚園や保育所にも取り入れて欲しいという話があったが、こどものフロスの利用は親が手伝うものか。

団体：

フロスは使い方を間違えると口内を傷つける場合もあるため、こどもの年齢に応じて、親に手伝ってもらわなければならないと考える。

眞野委員：

保育所、幼稚園でも保護者が共働きである家庭も多い。保護者が来る可能性が高い乳幼児健診などで案内することも有効と考えられる。

齊藤委員：

普及啓発するデンタルフロスは繰り返し使えるものなのか。

団体：

糸が破れない限りは水洗いして何度も使えるものが多い。

齊藤委員：

子育てにはお金がかかるため、フロスに関して費用面の情報も併せて案内してもらえると良いのではないか。

大井委員：

発表スライド内で記載があったが、配布するチラシは1000部で足りるのか。広く広報するため、チラシだけでなく他団体と協働して広報できると良いのではないか。

団体：

団体の発信媒体としてInstagramは持っているが、フォロワーが関係者だけになっている。他大学の大学祭にも出店しているが、他団体との協働も進めていきたい。

事業 5

事業名：《自由提案型》 ことばをこえてつながろう！ 国際交流フェス in 仙台

団体名： Japarian Family

柴田委員長：

解決したい課題に「お互いに近づきたいと思っではいるが、異文化に触れにくい現状がある」とあるが、「お互いに近づきたい」という考えはどこから出てきたのか。

団体：

これまで Japarian Family が主催してきたイベント参加者から寄せられた声である。

齊藤委員：

これまでのイベントへの参加者や属性を教えてください。

団体：

大人向けイベント・子ども向けイベントともに毎回 30 名程度。こどもの属性は、英語を勉強している人と勉強していない人が半々くらい。参加者の年齢層も幅広い。

太田委員：

会場や日程はどのように想定されているか。予算書に記載のある緑彩館の予約はすでに埋まっており、想定されている秋の開催は難しいかもしれない。

団体：

今後検討を重ねる。

眞野委員：

英語にあまり慣れていない人が国際交流フェスに参加するにはハードルが高いように思われるが、そういった参加希望者に対し、どのような工夫を行うか。

団体：

これまでのイベントでは、フリートークにせず、英語も日本語も話せる MC を必ず付けるように気を付けている。また、英語を使った多様なアイスブレイク・ゲームを用意して、小さな成功体験を積めるように設計している。

大井委員：

今後の運営体制を教えてください。

団体：

現状は基本的に 3 人で、企画から当日の運営までを一貫して行っているが、今後は外国人主体の企画・

運営体制の確立を目指している。外国人が求める国際交流と日本人が求める国際交流は実は異なっているため、両者の距離を縮めるような場づくりを目指しており、外国人主体の体制で進めていけたらと考えている。

事業 6

事業名：《自由提案型》エコチャレ SENDAI

団体名： Eco Clean

柴田委員長：

仙台市の課題や地域の現状などについても丁寧に分析されており、事業の必要性についての説明に納得できた。

皆さんは今年 4 月に団体を立ち上げたとのことだが、そのきっかけや団体に込めた思いなどを教えていただきたい。

団体：

私たちは、有志の学生団体である。メンバーである学生の多くは、これまで地域の環境系ボランティアなどに参加してきた。

若者を中心とした環境問題や環境美化意識の欠如については、仙台市出身者に限らず、全国各地から集まってきた学生たちも実感している。仙台市に引っ越してきた学生からも「ごみの分別方法が分からない」といった声を多く聞いている。このような背景から、楽しみながら環境意識を高めてもらえるよう、ゲーム感覚のごみ拾いイベントを開催し、環境リテラシーや美化意識の向上を目指していきたいという想いで団体を設立した。

齊藤委員：

9 月に開催を想定しているごみ拾いイベントについてだが、現在想定している参加人数はどの程度か。

団体：

現在のところ、200 名弱の参加者を見込んでいる。私（団体の代表者）は福島県西郷村出身で、地元で中高生向けのごみ拾いゲームイベントを開催した経験がある。その際は 120 名弱が集まり成功した。今回のイベントも同様に、200 名弱の参加を想定している。

齊藤委員：

団体が立ち上がって間もない中で申請をされたということもあり、200 名規模のイベントがどれほど実現可能かを懸念している。資金を受け取った以上は必ず実行しなければならず、お互いに無理のない範囲で進めることが望ましい。とはいえ、新たな挑戦を応援したいという気持ちもある。うまく運営してほしいと期待している。

太田委員：

オリジナルの軍手やスタッフ T シャツを制作する意図について教えてほしい。

団体：

オリジナル軍手については、通常の軍手でも問題なかったと思うが、大会に参加してくれた人に持ち帰って

もらえるよう、団体やイベントの情報を印字したものにする予定である。これにより廃棄されるリスクを減らし、記念品としても機能するようにと考えている。

スタッフＴシャツについては、参加者とスタッフの区別を明確にし、運営の効率を高めるために必要と考えている。西郷村で開催したイベントでも、遠くから見てスタッフと分かるような服装は非常に重要だったため、今回も取り入れたい。

眞野委員：

今回のプロジェクトで解決したいと考えている課題、特にごみの分別に関するリテラシーについてだが、どの世代にその意識の低さを感じているのか。

団体：

主に大学生や高校生といった若者である。実際に学生からも「高校までは保護者がごみ出しをしていたが、大学で一人暮らしを始めてから困っている」という声が多く聞かれる。仙台市でも分別方法をまとめた冊子などを作成しているが、それでも分かりづらいという声があり、同じように感じている学生は多数いると考えられる。そのため、学生を中心に、楽しみながら分別方法やリテラシーを身につけてもらい、最終的には仙台市が掲げる「2030年までに家庭ごみ排出量を1人1日400g以下に抑える」という目標達成に寄与したいと考えている。

眞野委員：

町内会などでも、30代の方でごみの出し方に悩んでいるという話を聞く。仙台は転入者が多いという地域特性もあり、今回のテーマは非常に重要だと感じる。

最後に、スタッフＴシャツのイベント終了後の取り扱いについて教えてほしい。

団体：

今回のイベントで配布するＴシャツについては、参加者が普段着として使用する可能性は低いと思われるため、来年以降も同様の大会を開催する場合は再利用できるよう、団体の資産として保管・活用したいと考えている。

大井委員：

情報発信や集客についてはどのように考えているのか。また、イベントの具体的な開催場所についても教えて欲しい。

団体：

仙台市と協働して実施する場合は、仙台市のホームページやSNS、また団体のInstagramなどを活用し、情報発信を行う。さらに、大学内にある総合ボランティアステーションとも連携して、周知を行っていく予定である。

開催場所については、当初は国分町周辺を想定していたが、200名規模の移動における安全性を考慮し、西公園周辺を候補としている。

また、青葉区民まつりへの出店も検討している。昨年、団体メンバーが学生ボランティアとして参加しており、多世代にわたる来場者との接点があった。親子連れも多く、世代を超えた啓発活動が行える機会と捉えており、今後の活動の一環として出店を希望している。

事業7

事業名：《テーマ設定型》 ぴあミーティング

団体名： 仙台赤門短期大学まちかど保健室

太田委員：

課題に挙がっていた「性教育が足りていない」という点については、まさにその通りである。若年層は相談したくても相談をためらってしまうという現状があり、同年代かつ同性に相談できる仕組みは非常に心強く、重要だと考える。

また、SNSの活用も重要である。当事者がSNSでメッセージのやり取りを行う中で実は深刻な悩みを抱えていたと分かる場合もある。こうした背景を踏まえると、SNSを活用した相談体制の構築は有効だと考える。

最後に、柔らかく伝えるという意味でキャラクターを活用するのは良いアイデアだが、キャラクターを作って機能させるのは簡単ではない。キャラクターに過度な期待は禁物であり、慎重に運用すべきである。

柴田委員長：

ピアカウンセリングの重要性については共感する一方、開催場所について懸念がある。赤門まちかど保健室という既存の場所を活用するということであるが、そこはこれまで主に高齢者が利用していたと聞いている。開催日時を変えるだけで、果たして若年層がその場所に足を運ぶようになるのか気になっている。場所の決定に関しては、どのような検討を行ったのか教えてほしい。

団体：

私たちが活動を行う保健室は国分町にあり、土日や長期休暇中には大学生や高校生など、私たちと同じような若年層がアクセスしやすい場所であると考えている。そのため、この場所を選定した。

眞野委員：

活動を行う時間帯について確認したい。皆さんにとっては課外活動の時間という位置づけになるのか、それとも大学の単位として認められているのか。

団体：

単位としては認められていない。私たち自身の意思でこのプロジェクトに参加している。

眞野委員：

開催当日の運営体制についても少し気になった。私自身、性教育支援に関わっている立場から、相談の場において公的機関等に繋げる判断や連携体制も非常に重要だと感じている。現時点でそのような連携先はあるのか。

団体：

現時点では明確な連携先はないが、今後の活動の中でしっかりと整備していきたいと考えている。

眞野委員：

ぜひ整備をお願いしたい。性教育というものは昔から「自己責任」という言葉のもとで語られてきたが、社会全体で見直す必要がある。性に関する問題は決して個人だけの問題ではなく、社会課題として捉えるべきである。

大井委員：

事業効果の中に「自身のライフプランを考える機会を持てる」との記載がある。事業内容のどの部分で実現するのか。

また、アンケートの実施についてはどのように想定しているのか。

団体：

1 点目の「ライフプランを考える機会の提供」については、性や健康に関する悩みを早期に相談できることで、望まない妊娠や性感染症を未然に防げると考えている。私たちが相談役となることで、悩みの解決につながり、最終的には自分の将来をどう生きたいか、何歳でこどもが欲しいかといった具体的なライフプランを考えるきっかけになると信じている。

2 点目のアンケートについては、イベント実施時に参加者から感想や改善点などを収集することで、今後の活動に活かしていく予定である。

大井委員：

若い世代と一緒に語り合うことにこそ意味がある。地域との関係性や進め方についても丁寧に取り組んでほしい。

齊藤委員：

非常に重要な課題に取り組まれていると感じた。

5 つのプロジェクトそれぞれに対象者があると思うが、どのような層を想定しているのか。

団体：

主に大学生や高校生など、同世代の若年層を対象にしている。社会人についても、同年代であれば対象として想定している。

齊藤委員：

性別の限定はあるのか。

団体：

性別は問わない。

齊藤委員：

他審査委員からの意見にもあがっていたが、ピアサポートについては、知識の有無を超えて「まず話せる」ことが重要である。一方で、相談内容の緊急性によっては、的確な判断を求められる場面もあるだろう。したがって、ターゲット層や目的に応じて、事業の内容をしっかりと設計することが重要である。

また、プライベートな内容に踏み込む場面も想定されるため、相談者に過度な負担がかからないよう、支援する側の体制づくりも必要である。PMS（月経前症候群）といったテーマも含め、性や健康に関する問題を「自己責任」だけに押しつけず、社会全体の課題として捉える視点が求められる。最近では女性の体調に配慮した制度も増えているが、なお社会全体での理解が不足している面もある。このような活動が、理解促進につながることを期待している。

5 閉会